

厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）
小児がん拠点病院を軸とした小児がん医療提供体制のあり方に関する研究
分担研究報告書

「分担課題名：東北大学病院および東北ブロックにおける
小児がん医療提供体制の検討」

研究分担者 笹原 洋二

東北大学大学院医学系研究科 発生・発達医学講座 小児病態学分野
准教授

研究要旨

東北大学病院は東北ブロックにおいて唯一の小児がん拠点病院であり、東北ブロックにおける小児がん医療体制の実態把握と、地域内連携体制のあり方の検討と具体的な構築が求められている。

本研究分担では、東北ブロックにおける小児がん拠点病院および小児がん診療病院10施設間の連携体制について、東北ブロック小児がん医療提供体制協議会の構成と東北ブロック内連携のための具体的方法、小児がん長期フォローアップ医療提供体制と地域連携についてまとめた。これらの結果をもとに、東北ブロック内における小児がん医療提供体制のあり方について検討した。

A．研究目的

東北大学病院は東北ブロックにおいて唯一の小児がん拠点病院である。

本研究分担では、東北ブロックにおける小児がん拠点病院および小児がん診療病院10施設において、東北ブロック小児がん医療提供体制協議会の構成と東北ブロック内連携のための具体的方法、長期フォローアップ医療提供体制と地域連携についてまとめ、東北ブロック内における小児がん医療提供体制および地域内連携体制のあり方の検討を行うことを目的とした。

B．研究方法

1.東北ブロック内の小児がん医療連携のための具体的方法

東北ブロック内の小児がん患者動向の解析結果を踏まえ、現在の状況のまとめを行い、今後の方向性について検討した。

2.長期フォローアップ医療提供体制と地域連携

これについては、東北ブロックにおける現在の医療提供状況をまとめた。

（倫理面への配慮）

小児がん症例の個人情報の保護については厳重な管理と配慮を行って対応した。

研究課題名「小児がん拠点病院でフォローアップ中の小児がん経験者の実態調査と長期的支援への橋渡しに関する研究」

は平成 27 年 12 月 21 日に東北大学大学院医学系研究科倫理委員会審査を受け、承認を得ている。

C . 研究結果

1. 東北ブロック内の小児がん医療連携のための具体的方法

図 1 に東北ブロックの小児がん診療病院 10 施設の分布を示す。特徴としては、各県に 1 - 2 施設の小児がん診療病院が平均して分布している点であり、標準的治療については各県の小児がん診療病院にて十分な診療が行われている。

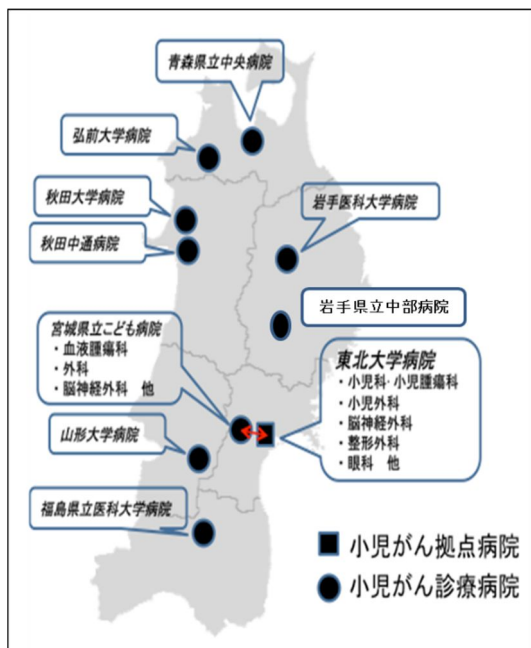


図 1 東北ブロックにおける小児がん診療病院の分布

小児がん医療連携の具体的方法としては、年 2 回 TV 会議システムを利用した小児がん症例合同ネットカンファレンスを開催し、各施設の症例検討を行っている。これとは別に、宮城県立こども病院血液腫瘍科と月 1 回 TV 会議ネットカンファレンスを定期的で開催し、両施設の症例検討と情報交換を行っている。

また、平成 28 年 8 月に東北ブロック小児がん相談支援部会を設立し、年 2 回の小児がん相談支援部会を開催し、内 1 回は TV 会議システムを利用して開催した。2 . 長期フォローアップ医療提供体制と地域連携

図 2 に東北大学病院における長期フォローアップ外来、および移植後フォローアップ外来の現状についてまとめた。

長期フォローアップ外来

- ・月曜日、金曜日午後開設。
- ・内分泌専門医、循環器専門医、看護師、臨床心理士と連携して診療を行う。
- ・宮城県内で卵子、精子保存体制の構築を産婦人科医とともに計画中。

小児がん専門医: 2名

外来患者数:

治療終了後5年以上経過 月10-20例

移植フォローアップ外来

- ・第2、第3週の月曜日、金曜日に開設。
- ・内分泌専門医、循環器専門医、看護師、臨床心理士、MSWと連携して診療を行う。
- ・月初めに小児がん専門医と上記担当者が事前にカンファレンスを行う。
- ・問診票の作成、記録。

小児がん専門医: 2名

外来患者数: 月10例前後

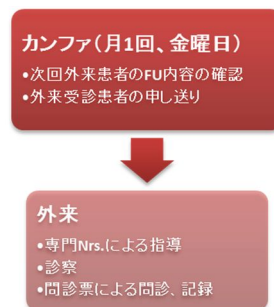
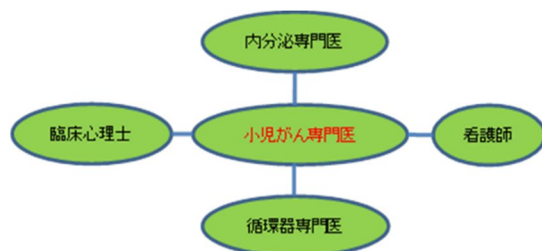


図2 東北大学病院における長期フォローアップ体制および移植後フォローアップ外来の開設

各小児がん診療病院の長期フォローアップ体制の把握と連携体制の構築は今後の課題である。

D．考察

東北ブロック内での小児がん診療連携体制としては、小児がん患者のほぼ全例が小児がん診療病院にて診療が行われており、東北ブロックの特徴として、標準的治療としては各県の小児がん診療病院にて診療が完結する傾向があることが挙げられる。疾患別に検討した場合、固形腫瘍患者、特に脳腫瘍患者は小児がん拠点病院をはじめとして集約化に向かう傾向にある。小児がん拠点病院に集約すべき疾患としては、再発難治例、新規治療が必要な症例(臨床試験を含む:東北大学病院は臨床試験推進センターがあり、臨床試験中核病院に指定されている)、高度手術手技と集学的治療を要する脳腫瘍症例、免疫不全症など特殊な病態のある症例に特化して、集約化することが必要であり、集約化と均てん化のバランスをとりながら診療連携を行うことが重要と考えられた。

東北大学病院における長期フォローアップ体制および移植後フォローアップ外来の開設は、小児がん拠点病院での体制として確立されている。他の小児がん診療病院での長期フォローアップ体制は病院間でまだ格差があり、全体的な体制強化が今後の課題となっている。

診療連携においては、特に東北ブロックにおいて、遠隔医療としてのTV会議ネットワークの構築は極めて有用であっ

た。これは、東北ブロック小児がん相談支援部会の開催にも利用されており、多職種医療スタッフの教育や情報共有の場として極めて有用であった。

E．結論

東北ブロックにおける小児がん拠点病院および小児がん診療病院10施設におけるブロック内連携のための具体的方法、長期フォローアップ医療提供体制と地域連携についてまとめた。

今後は各小児がん診療病院における長期フォローアップ体制の底上げと、多職種間の情報共有が極めて重要と考えられ、そのためのTV会議ネットワークシステムは遠隔医療システムとして東北ブロックでは特に有用であるため、今後も活用したいと考えている。

F．健康危険情報

特になし。

G．研究発表

1．論文発表

1) 笹原洋二. 小児がん拠点病院としての東北大学病院の取組み. 東北医学雑誌, 128: 19-21, 2016.

2．学会発表

なし。

H．知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

1．特許取得

なし。

2．実用新案登録

なし。

3．その他

なし。